

1966. Fluorescence of chlorophyll in photosynthetic systems III. Emission and action spectra of fluorescence—three emission bands of chlorophyll *a* and the energy transfer between two pigment systems. *Biochim. Biophys. Acta* 126: 234-243.

PRESCOTT, G.W. 1969. *The algae: A review.* Thomas Nelson and Sons, London.

SHIBATA, K., A.A. BENSON and M. CALVIN 1954. The absorption spectra of suspensions of living micro-organisms. *Biochim. Biophys. Acta* 15: 461-470.

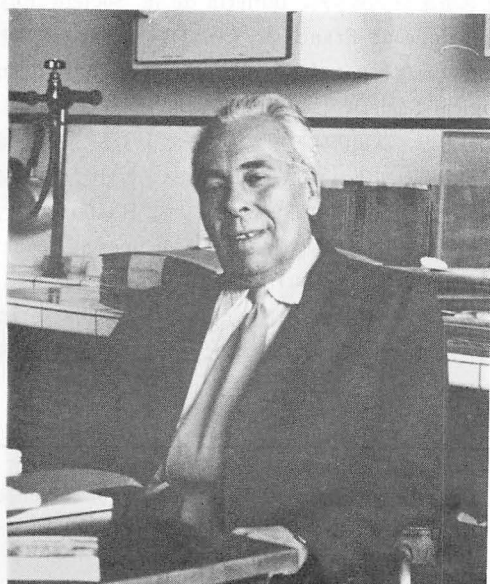
YOKOHAMA, Y., A. KAGEYAMA, Y. IKAWA and S. SHIMURA 1977. A carotenoid characteristic of chlorophycean seaweeds living in deep coastal waters. *Bot. Mar.* 20: 433-436.

影山明美*・横浜康継*： チョウチンミドロにおける Siphonein の機能

深所性の緑藻に含まれる Siphonaxanthin が深所に優占する緑色光を捕捉する光合成色素とみなしうることはすでに報告したが、この色素のエステルでクダモの多くに含まれる Siphonein については、従来入手できた Siphonein 含有種がすべて Siphonaxanthin をも含んでいたため、その機能を明らかにできなかった。本研究においては、例外的に Siphonaxanthin を含有せずに Siphonein を含有するチョウチンミドロを採集し得たため、これを用いて、生体吸収スペクトルおよび生体クロロフィル *a* 蛍光に対する励起スペクトルを調べたところ、Siphonaxanthin 含有種にみられたと同様な 540 nm (緑色部) 附近のピークが明らかにみられた。このため、Siphonein も緑色光を特異的に吸収して、その励起エネルギーを効率よくクロロフィル *a* に伝達する光合成色素とみなすことができる。(*415 静岡県下田市 5-10-1, 筑波大学下田臨海実験センター)

吉田忠生： Jean FELDMANN 先生をしのぶ

Tadao YOSHIDA: Professor FELDMANN (1905-198), in memoriam



France の Jean FELDMANN 先生が1978年9月18日亡くなられた。1905年生れて享年73才あった。France のみならず、世界の藻学界にとっても大きな損失である。

先生は Paris で高等教育を受けられ、その頃から生物学の各方面に関心を持たれて、種子植物・菌類を

広く勉強された。1925年 Bretagne 地方の Roscoff における海藻学臨海実習を通じて学問的興味の中心を海藻に向けられることになったという。その当時 France では BORNET, THURET の亡きあと、SAUVAGEAU が Bordeaux において活潑な研究を進めていた他には CHEMIN, HAMEL, OLLIVIER 等がいたけれども、Paris で勉強を進めておられた先生にとって特に師と呼べる人はいなかったようである。SAUVAGEAU の助言によって開始された地中海沿岸 Banyuls 地方の海藻の研究は、先生のその後の幅広い研究活動の基礎になったものである。それまであまり手のつけられていなかった海藻の生態学の分野に進むことを目指しながら、そのために必要不可欠な分類学的・分布的な知見の不足を自らの手で満たすために、同時に France では最も知られていなかったその地方の海藻相を明らかにすることにも努力された。その結果として“Les algues marines de la côte des Albères I-IV” (1937, 1942) が発表された。この大著の示唆に富む記述にはその後の研究の萌芽が多く含まれており、後年の成果と考え合わせて観察の鋭さにただ感心させられるのみである。生態学的な面をまとめた“Recherches sur la végétation marine de la Méditerranée. La côte des Albères” (1937) はこの分

野の古典というべきものである。

1933年に Alger 大学理学部の助手となられ、講師をへて1948年に教授になられた。この期間に研究の範囲を Africa 北岸のみならず、地中海西部の各地から Antilles 諸島にまで拡げて、種々な分野にわたる多数の論文を発表された。先生の研究態度は一貫して海藻を生きた状態で観察することを基調としておられ、そのことから細胞内容物についての詳細な知見と、それを分類体系の基準として用いる方向が生れ、その例は *Laurencia* の 'corps en cerise' や *Acrochaetiales* の仕事などいくつも挙げることができる、生活史に関しても *Bonnemaisoniacées* に関するものを特筆すべきであろう。真正紅藻類において異形世代交代を最初に明らかにしたこの仕事は、先生の最初の学生であり、妻であり、協力者でもある Geneviève 夫人との協同研究である。

形態学の面では直接表立った仕事は少ないけれども、CHADEFAUD がユニークな考えを提出したのも、先生の支持・助言があったからだと言える。この説を講議を通じて普及させた先生の功績も見逃せない。

1950年に Paris に戻られて海洋植物学研究室 *Laboratoire de Biologie Végétale Marine* を開設され、大学院教育に当られることになった。以後は後進の指導に特に努力を傾けられ、研究室の後継者となった MAGNE をはじめとして多数の学生がこの研究室で学び、現在では各方面にわたって活躍している。また国外からの学生も多数受入れて、研究室は常に国際的な雰囲気があったようである。この間にも Viet Nam・日本等各地の海藻を実地に観察して、地中海・大西洋だけでなく、太平洋のものまで更に知識を拡げることにも勉められている。

一方学会活動の面でも精力的で、1954年の *Congrès International de Botanique (Paris)* ではじめて藻類部門を独立して設けられ、1661年には *International Seaweed Symposium* の組織委員の1員として Biarritz での第5回会議を主催された。1955年には BOURRELLY, CHADEFAUD, DAVY DE VIRVILLE, DEFLANDRE と共に *Société Phycologique de France* を組織され、また1961年に *International Phycological Society* の設立に尽力されて初代会長

を勤められるなど極めて多方面にわたっている。

欧州を旅行した日本の研究者は殆んどすべて先生の研究室を訪ねている。また1966年東京で開催された *Pacific Science Congress* の際、夫人と共に来られ、その後は1971年に札幌で行なわれた *7th International Seaweed Symposium* に出席されたので、先生の人となりを知る方々は日本にも数多い。私事にわたって恐縮であるが、私は1972年から1973年にかけて10か月間先生の研究室で過す機会を得た。御多忙な先生に接する機会は必ずしも多かったとは言えないが、Roscoff, Villefranche-sur-Mer, Banyuls-sur-Mer の各実験所では野外でも指導をいただいた。当時はすでに70才に近い年齢にもかかわらず、元気に海岸に出て学生の指導をしておられた。その広い学識は多方面にわたる指導・助言として今も記憶に新しい。その温厚な人格と共に多くの人を惹きつけずにはおかない。France の大学者がそうであるように、先生は文章家としても優れておられることは、その論文や著書からも覗かれる。

1975年パリ VI 大学 *Université Pierre et Marie Curie (Paris VI)* の教授職から引退されるに当って *Société Phycologique de France* が中心となって記念事業が企画され、*Bulletin de la Société Phycologique de France* 22号が記念号として出版された他、記念メダルが作られた。*International Phycological Society* でも *Phycologia* 15巻3,4号を記念号とし、藻類研究の国際協力を拡大するために基金が集められて *FELDMANN Fund* と名付けられている。引退後も引き続いて研究室にあって、HAMEL の手ではじまり、途中から協力された *Floridées de France* の続編を執筆しておられるということであった。

先生のように広い視野と学識をもった学者を失ったことは誠に残念であるが、今はただ先生の御冥福を祈るのみである。

北海道大学理学部植物学教室 (060 札幌市北区北10条西8丁目)
Department of Botany, Faculty of Science,
Hokkaido University, Sapporo, 060 Japan.

Jap. J. Phycol. 26(4): 155-156